



< H24061121 >

注意事項

- 1 問題冊子は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
- 2 問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべてマーク解答用紙の記入欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルでマークすること。
- 4 試験開始後、氏名をマーク解答用紙の所定欄（一箇所）に記入すること。
- 5 マーク欄はつきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムでていねいに、消し残しがないように消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

マークする時	● 良い	● 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	● 悪い	○ 悪い

- 6 試験終了の指示がでたら、すぐに解答を止め、筆記具を置くこと。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお、四角でかこつたA～Dは順序を入れ替えてある。

早稲田へ移ってから、猫が **a** 瘦せて来た。一向に小供と遊ぶ気色がない。日が当たると縁側に寝ている。前足を揃えた上に、四角な顎を載せて、じっと庭の植込を眺めたまま、いつまでも動く様子が見えない。小供がいくらその傍で騒いでも、知らぬ顔をしている。小供の方でも、初めから相手にしなくなった。この猫はとも遊び仲間に来ないと云わん許りに、旧友を他人扱いにしている。小供のみではない下女はただ三度の食を、台所の隅に置いてやるだけでそのほかには、ほとんど構いつけなかった。しかもその食はたいいてい近所にいる大きな三毛猫が来て食ってしまった。猫は別に怒る様子もなかった、喧嘩をする所を見た試しもない。ただ、じっとして寝ていた。しかしその寝方にどことなく余裕がない。伸んびり楽々と身を横に、日光を領しているのと違って、動くべきせき(注1)がないために——これでは、まだ形容し足りない。懶さの度のある所まで通り越して、動かなければ淋しいが、動く **b** ので、我慢して、じっと辛ボウしている様に見えた。その眼つきは、いつでも庭の植込を見ているが、彼れは恐らく木の葉も、幹の形も意識していなかったのだろう、青味がかった黄色い瞳子を、ほんやり一と所に落ち付けているのみである。彼れが家の小供から存在を認められぬように、自分でも、世の中の存在を判然と認めていなかったらしい。

それでも時々は用があると見えて、外へ出て行く事がある。するといつでも近所の三毛猫から追っかけられる。そして、怖いものだから、縁側を飛び上がって、立て切つてある障子を突き破つて、囲炉裏の傍まで逃げ込んで来る。家のものが、彼れの存在に気がつくのはこの時だけである。彼れもこの時に限つて、自分が生きている事実を、満足に自覚するのだろう。

これが度重なるにつれて、猫の長い尻尾の毛が **a** 抜けて来た。始めはどこどころがぼくぼく穴のように落ち込んで見えたが、後には赤肌に抜け広がって、見るも気の毒な程にだらりと垂れていた。彼れは万事に疲れ果てた、体を屈し曲げて、しきりに痛い局部を舐めだした。

A 猫は吐気がなくなりさえすれば、依然として、おとなしく寝ている。この頃では、じっと身を竦めるようにして、自分の身を支える縁側だけが便であるといふ風に、いかにも **c** 蹲踞まり方をする。眼つきも少し変つて来た。始めは近い視線に、遠くのもの映るごとく、悄然たるうちに、どこか落ちつきが有つたが、それが次第に怪しく動いて来た。けれども眼の色は **a** 沈んで行く。日が落ちて微かな稲妻があらわれる様な気がした。けれども放つておいた。妻も気にもかけなかったらしい。小供は無論猫のいる事さえ忘れてる。

B 「どいもしようがないな。腸異が悪いんだろう、宝丹でも水に溶いて飲ましてやれ」

妻は何とも云はなかった。二三日してから、宝丹を飲ましたかと聞いたら、飲ましても駄目です、口を開きませんという答をした後で、魚の骨を食べさせると吐くんですと説明するから、じゃ食わせんが好いじゃないかと、少し嶮どんに叱りながら書見をしていた。

C ある晩、彼は小供の寝る夜具の裾に腹這になつていたが、やがて、自分の捕つた魚を取り上げられる時に出すような唸声を挙げた。この時変だなど気がついたのは自分だけである。小供はよく寝ている。妻は針仕事にヨ念がなかった。しばらくすると猫がまた唸つた。妻はようやく針の手をやめた。自分は、どうしたんだ、夜中に小供の頭でも嚙られちゃ大変だと云つた。まさかと妻はまた襦袢の袖を縫い出した。猫は折々唸つていた。

D おい猫がどうかしたようだと云うと、そうですね、やつぱり年を取つたせいでしょうと、妻は至極冷淡である。自分もそのままにして放つておいた。すると、しばらくしてから、今度は三度のものを時々吐くようになった。咽喉の所に大きな波をうたして、嘔とも、しゃくりともつかない苦しそうな音をさせる。苦しうだけども、 **d** から、気がつくときと表へ追出す。でなければ畳の上でも、布団の上でも容赦なく汚す。来客の用意に拵らえた八反(注2)の座布団は、おおかた彼れのために汚されてしまった。

明るく日は囲炉裏の縁に乗ったなり、一日唸っていた。茶を注いだり、葉缶を取ったりするのが気味が悪いようであった。が、夜になると猫の事は自分も妻もまるで忘れてしまった。猫の死んだのは実にその晩である。朝になって、下女が裏の物置に薪を出しに行った時は、もう硬くなって、古い竈の上に倒れていた。

妻はわざわざその死態を見に行った。それから今までの冷淡に引き更えて急に騒ぎ出した。出入の車夫を頼んで、四角な墓標を買って来て、何か書いてやって下さいと云う。自分は表に猫の墓と書いて、裏に **e** と認めた。車夫はこのまま、埋めてもいいんですかと聞いている。まさか火葬にも出来ないじゃないかと下女が冷かした。

小供も急に猫を可愛がり出した。墓標の左右に硝子の罌を二つ活けて、萩の花をたくさん挿した。茶碗に水を汲んで、墓の前に置いた。花も水も毎日取り替えられた。三日目の夕方に四つになる女の子が——自分はこの時書斎の窓から見ていた。——たった一人墓の前へ来て、しばらく白木の棒を見ていたが、やがて手に持った、おもちゃの杓子をおろして、猫に供えた茶碗の水をしゃくって飲んだ。それも一度ではない。萩の花の落ちこぼれた水の瀝りは、静かな夕暮の中に、幾度か愛子の小さい咽喉を潤おした。

猫の命日には、妻がきつと一切れの鮭と、鰹節を掛けた一杯の飯を墓の前に供える。今でも忘れた事がない。ただこの頃では、庭まで持つて出ずに、大抵は茶の間の筆筒の上へ載せておくようである。

(夏目漱石「猫の墓」より)

注1 せき……積。容積のこと。当時の東京の俗語。「せきがない」で、余裕がない、の意。

注2 八反……通常より大きめの座布団のサイズ。

注3 竈……台所の煮炊きするかまど。

問一 傍線1～2にあたる漢字を、それぞれ次のア～オから一つずつ選び、その解答欄にマークせよ。

- 1 ア 棒 イ 房 ウ 忘 エ 舐 オ 抱
2 ア 与 イ 予 ウ 余 エ 世 オ 誉

問二 空欄 **a** は三箇所あるがすべて同じ一つの語句が入る。もつとも適当な語句を次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 随分 イ 不意と ウ 少々 エ 案に相違して オ 段々

問三 文中の段落A～Dは、猫が衰えて死に向かう過程を筆者が順を追って観察している場面である。その順序としてもつとも適当なものを次のア～カから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア C↓D↓A↓B イ B↓A↓D↓C ウ D↓B↓A↓C
エ A↓B↓D↓C オ D↓C↓B↓A カ C↓B↓A↓D

問四 空欄 **b** 〳 **d** に入るもつとも適当な語句をそれぞれ次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- a** 〳 **b** 〳 **c** 〳 **d** 〳
ア 体軀に堪える イ きつと吐き気が募る ウ いよいよ空しい
エ なお淋しい オ 朝が辛い
ア 億劫な イ 切り詰めた ウ 悠揚たる
エ 僻んだ オ 屈託した
ア 論外だ イ やむをえない ウ 不衛生だ
エ 止めようがない オ 見かけだけだ

問五 空欄

e

に入るもつとも適当な俳句を次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 恋猫や主人は心地例ならず
- イ あるほどの菊なげ入れよ棺の中
- ウ 猫の子が手でおとすなり耳の雪
- エ ねこの子のくんづほぐれつ胡蝶哉
- オ 此下に稲妻起る宵あらん

問六 この文章を書いた著者の思いを説明する記述として内容に合致するものを次のア～カから二つを選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 著者は猫の死を叙しながら、死なれてみて存外に自分の心に應えるものであった悲嘆を、死の瞬間の一瞬の生の輝きに託して切々と描いている。
- イ 著者は飼い猫が弱っていく間は冷淡であった妻や子どもたちが、死んでから急に騒ぎ出し、墓まで作ったことに、人生の皮肉を見てとっている。
- ウ 著者は飼い猫の弱り、死んでいくさま、またその死が引き起こす家族の反応をひとしなみに平常心のうちに同情をもって記述している。
- エ 著者は飼い猫が家族の冷淡のうちに死んでいったこと、自分も結局は無関心であったことに、かすかながら哀れであったという後悔の念を抱いている。
- オ 著者は、猫の死とその猫の墓の前で示された幼子の所作に人生のうちに起こる死と生の交錯を見、清澄な感慨を覚えている。
- カ 著者は、猫が死んだ後、家族の者がひとときわ関心を示し、やがて忘却していくようであるさまを、人生のごく自然ななりゆきとして、ユーモラスに描いている。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

十九世紀の後半にいたるまで、日本人にとって、詩とか文学とかは和文学か漢文学に限られていた。漢字という本字で書かれた漢文学がまず尊ばれ、ついで漢字仮名混じりの日本語作品が、そして仮名で書かれた和文もまた読まれた。明治維新前の日本人にとって、白楽天などの漢詩や四書五経などの漢文や漢訳仏典や、また和歌や和文の文学はすでに過去千年以上の長きにわたって存在していたが、しかし百五十年前の日本人にとってはシェイクスピアもダンテもゲーテも存在しなかった。当時の地球上には漢字文化を中心とする東アジア文化圏が地球のこちら側にあり、地球の裏側の西洋にはまた別個の一大文化圏があった。グローバル化以前の地球には複数の世界、複数の文化圏がほとんど別箇に存在していたのである。ところがその両者の間に少しずつ接触と¹オウ来が行われるようになった。

十九世紀の中葉、南アジアの諸地域は植民地化という形で西洋との接触を強いられたが、東アジアの国々はことごとく西洋に対して鎖国していた。それら東洋の国の中で、いち早く目を中華の古代の聖賢から転じて²ハンを西洋近代に求めようとしたのは日本であった。非西洋の中で日本はロシアについていち早く西洋化運動を始めた国である。これは極東という大文明の周辺に位置していた日本にはもともと漢文明という外来文明摂取の長い伝統があり、西洋の優越した産業文明の脅威を感じるや、その挑戦に応答するべく、目を漢文明から西洋文明へ転じ、近代化運動を開始したことに随伴して生じた新現象であった。千年以前の^A魂^B才という態度から^C魂^D才という態度へ日本人が切り替えた結果である。その方向転換を非難する人は「脱亜入欧」と呼ぶが、古いアジアの旧套³を脱して西洋先進文明摂取の運動を開始したことを明治の日本人は肯定した。そのいわゆる^甲についてはよそで詳しく説いたので述べない。ここでは日本人が西洋文学に目を向けることのきわめて早かった非西洋の国民であること、第一外国語についていえば「^E脱^F入^F」をなしとげたという史的事実を述べるにとどめよう。

具体的には誰を思い浮かべればよいのか。日本人に漢籍を排して英書を読むことを説いた第一人者は福沢諭吉である。しかし福沢世代の啓蒙家たちはいまだ芸術作品としての西洋文学を味わう術を心得ていなかった。十九世紀の末年、若い森鷗外が活躍を始めた明治二十年代から日本は西洋文学を本格的に翻訳し始めた。「本格的に」ということは翻訳文の西洋文学作品が日本語の他の文学作品に比べてけっして見劣りしない芸術的水準に達した、ということである。森鷗外の『諸国物語』とか^乙の『海潮音』の何編かは、翻訳作品であるが、日本語芸術作品としても最高の部類に入るであろう。

ここで注意を引きたいことは、この種の二つの文化圏に跨る運動は必ずしも相互性を有するものではない、ということである。明治維新以前については、日本は漢文化を熱心に受容したが、中華の国は文化的に自給自足していて、唐も明も清も日本文化には別に関心を示さなかった。維新以後についていうならば、日本は欧米文化を絶対に必要とするかのごとく熱心に受容したが、西洋は文化的にはなお自給自足していて、東洋文化への関心は増大したとはいえず、それを絶対に必要とはしていなかった。明治維新以後、西洋化しつつある日本から学ぶことの必要を感じたのはむしろ中国・韓国であった。西洋は日本を経由して中国や朝鮮に伝わった。

それでは西洋は非西洋の文学に対して一体いつから目を向けたのか。産業革命以来の西洋は、地球上で自他ともに先進文明であることを誇っていた。しかしその先進性を誇るがゆえにアジアの文明を全面的に吸収しようなどとは思わなかった。アジア・アフリカを学ぶとすれば、当初は植民地化やキリスト教化の参考³にキョウ³するためであった。非西洋の言語と西洋語との間の辞書はまず西洋人宣教師によって作られた。一六〇三年（慶長八年）にロドリゲスの手で作られた日葡辞書 *Vocabulario da Lingoa de Iapam* はその一例である。十九世紀後半、オクスフォード大学の初代の中国語教授に任命された人が、長年香港でキリスト教伝導に従事しつつ孔子や孟子の中国古典を英訳したジェイムズ・レックグであったことも、西洋の東洋研究の開始が奈辺に存したかを示している。日本が後進国意識や憧憬に似た念をもって西洋文明を摂取しようとしたのは、様子が違うのである。そして自主的な文明摂取の運動が非西洋で開始されるや、文明摂取の工具としての辞書製作のイニシアティブも宣教師の手から非西洋の人の手に移った。日本も十八世紀の末、稲村三伯らが蘭和辞書を編訳して以来、辞書製作の大国の道を歩みだしたのである。私たちはまずそのような文化史的な背景の相違点にも注目しなければならない。逆説的ではあるが日本は文明の周辺にある国としてその後進性を意識し、先進文明に学ぼうとした。後進の度合いが激しいと先進文明を学ぶための工具である辞書すらも製作しない。しかし日本は非西洋の後進グループの中の優等生であったから、辞書も作り、その辞書を使って西洋文学の一大翻訳国となった

のである。日本には大翻訳家が登場するに必要な文化史的な条件が整っていたのである。

ひるがえって中国の詩とか日本の文学とかは一体いつから芸術作品として西洋で認められたのだろうか。中国や日本の文学は、それを発見してくれる人を待っていた。それはロシア文学の発見より一世代遅れてやってきた。

もしかりに東の大翻訳家森鷗外と対になるような西の大翻訳家を西洋に求めるならば、それはアーサー・ウェイリーではあるまいか。翻訳における創作家ではあつたけれども、自分自身が作家ではなかったウェイリーであるから、その名は英国でも、日本での鷗外ほど、喧伝されることはなかった。だが彼こそが二十世紀の最高の東洋学者であつた、と私は信じている。それはウェイリーの出現によって『源氏物語』をはじめとする日本文学は世界の第一級の文学として認知されたからである。

読者の中には私が下す次のようなすぐれた翻訳の定義に違和感を覚える人もいるであろう。日本人は授業や試験で英文和訳についての観念を身につけてきた。それはたとい日本語の表現がどこなくとも誤訳をしてはいけない、という身構えによって出来上がった翻訳観である。それに対して私は次のように考える。すぐれた翻訳とは何か。すぐれた翻訳とは、訳者自身が属する世代の母語のスタイルのうち外国作品を受容する。言い換えると、すぐれた翻訳作品とは、世間が考えるような原典の模範的翻訳というよりも、後世の人の眼には、むしろその翻訳が現れた時代の訳者の母語の文体の好個の標本として見られる言語芸術作品である場合が多い。鷗外の日本語文章の一番優れたもののいくつかは『冬の王』など日本語訳作品の中にもあると思うが、二十世紀イギリスの名詩のいくつかはウェイリーの中国詩英語訳にもある。

(平川祐弘『アーサー・ウェイリー』より)

問七 傍線部1～3にあたる漢字がカタカナ部分に使われている語をそれぞれ次のア～オから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|
| 1 | ア | 既オウ | イ | オウ収 | ウ | オウ断 | エ | オウ諾 | オ | オウ義 |
| 2 | ア | ハン問 | イ | 規ハン | ウ | 諸ハン | エ | ハン罪 | オ | 同ハン |
| 3 | ア | 活キヨウ | イ | 公キヨウ | ウ | キヨウ喚 | エ | キヨウ受 | オ | 提キヨウ |

問八 空欄 A F に入るもつとも適当な漢字をそれぞれ次のア～クから選び、その解答欄にマークせよ。(同じものが入ってもかまわない)

- ア 和 イ 洋 ウ 中 エ 漢 オ 英 カ 欧 キ 露 ク 西

問九 空欄 甲 に入るもつとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア Japan's aversion to the West
イ Japan's turn from the West
ウ Japan's return to the East
エ Japan's turn to the West
オ Japan's turn against the East

問十 空欄 乙 に入るもつとも適当な人名を次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 上田敏 イ 堀口大豊 ウ 与謝野鉄幹 エ 島崎藤村 オ 小泉八雲

問十一 傍線部 a 「この種の二つの文化圏に跨る運動は必ずしも相互性を有するものではない」の意味としてもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア 文化圏同士の間には上下があり、上位に位置する文化圏は下位に位置する文化圏に関心を持たないということ。

イ 東アジア文化圏と西洋文化圏が存在していて、お互いがほとんど交渉を持たなかったということ。

ウ 明治維新以前の日本人がシェイクスピア、ダンテ、ゲーテを知らなかったこと。

エ 明治維新以前には中国は日本文化に関心を示さなかったが、明治維新以後には日本語に訳された西洋の書物を中国語に訳すようになったこと。

オ お互いの文化に関心を示した人はいたが、芸術性の高い翻訳が生まれたとは必ずしもいえないこと。

問十二 傍線部 b 「大翻訳家が登場するに必要な文化的な条件」に合致しないものを次のア～オから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

ア 日本が後進性を意識していたこと。

イ 日本に西洋人宣教師によって西洋文化が伝えられていたこと。

ウ 日本では辞書が盛んに製作されていたこと。

エ 日本がまったく先進性を持たない国ではなかったこと。

オ 日本が憧憬の念を持って西洋文明を摂取しようとしたこと。

問十三 傍線部 c 「優れた翻訳の定義」の内容に合致するものを次のア～オから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

ア 翻訳の読者に明らかに誤訳とわかるものがない文章で書かれている。

イ 訳者の文化において違和感なく受けとめられるような設定で書かれている。

ウ 翻訳の読者が無理なく受容することができるような文体で書かれている。

エ 訳者の時代の文学の中でも傑出していると目される文章で書かれている。

オ 訳者の時代の文学における流行のスタイルで書かれている。

問十四 この文章の内容に合致するものを次のア～オから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

ア 外国文学を芸術作品として翻訳するような文化摂取が起こるためには、まず外国文化の摂取の必要が感じられなければならない。

イ 中国や西洋は文化的に自足していたため、外国文化を摂取するための工具である辞書製作はあまり進まなかった。

ウ アーサー・ウェイリーの翻訳の芸術性の背景には、キリスト教強化のための翻訳の積み重ねがある。

エ 中国は明治以降、日本文化を経由して西洋文明を摂取したが、それは日本が西洋の文学を芸術的に翻訳することができると中国人が認めたからである。

オ 日本人はぎこちなくとも間違いのない翻訳をしなければならないという先入観があるため、大翻訳家の数は少ない。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

和歌はよくことわりを極むる道なれば、これに寄せて心を澄まし、世の常なきを觀ぜむわざども、たよりありぬべし。近く蓮如といひし聖は、定子皇后宮の御歌、

よもすがら契りし事を忘れずは恋ひむ涙の色ぞゆかしき〔和歌Ⅰ〕
と待てるは、隠れ給ひける時、御門に御覽せさせむためと思しめて、帳の帷子の紐に結び給ひたりける歌なり。これを思ひ出だして、限りなくあはれに覚えければ、心にそみつ、この歌を詠じては、泣く泣く尊勝陀羅尼を讀みてぞ後世を弔ふ。また、詠めては、先のごとく誦す。かくしつ、

まどろまずして、冬の夜を明かしたりける。いみじかりける教寄者なりかし。勤めは、功と志によるわざなれば、必ずしもこれをあだなりと思ふべきにあらず。中にも教寄といふは、人の交はりを好まず、身の沈めるをも愁へず、花の咲き散るをあはれみ、月の出で入りを思ふにつけて常に心を澄まして、世の濁りに染まぬを事とすれば、おのづから生滅のこともわりも頭はれ、名利の余執尽きぬべし。これ、出離解脱の門出に待るべし。保元のころ、世に事ありて、崇徳院、讃岐に移ろはせ給ひける後、旅の御住まひ、あはれにかたじけなき事、言ひ尽くすべからず。国の兵ども、朝夕御所をうち囲みて、たやすく人も参り通はぬよし聞こゆれば、かの蓮如といふ教寄聖、もとより情深き心にて、いとかなしく覚えけれど、人遣ふ事もなかりけり。ただ、妹なる人の候ひけるゆかりに、御あたりの事をも聞き、また、昔、陪從にて公事勤めける時、御神樂などのついでに、まれに見参に入るばかりなれば、さしも深く嘆くべきにしもあらねど、わざとただ一人、みづから笈かけて、讃岐へ下りけり。行き着きて見れば、御所のありさま目も当てられず。伝へ聞きつるよりもけなり。されど、せちに内へ入らむと思ふ志深く、さるべきひまやあると、ひねもすうかがひけれど、守り奉る者、いとほしたなくとがめて、人隠るべくもあらず。空しく日も暮れにければ、月の明かかりけるに、笛を吹きてなむ、御所を廻りありきける。いかさまにせむと思ふほどに、やや暁に及びて、黒ばみたる水干ばかりうちかけたる人、内より出でたり。いとうれしくて、このたよりに御所の中に入りて見れば、草茂り、露深く、ことさら人の音もせず。いみじうものかなしきに、とばかり立ちわづらひて、板の端に書いて、見参に入れよとて、ありつる人になむ取らせける。

朝倉や木の丸殿に入りながら君に知られで帰るかなしき〔和歌Ⅱ〕

このをのこ、ほどもなく帰り来て、これを奉れと侍るといふを取りて、月の影に見れば、

朝倉やただいたづらに帰すにも釣りする海人の音をのみぞ泣く〔和歌Ⅲ〕

とぞ書かれたりける。いとかしこく覚えて、これを笈の中に入れつつ、泣く泣く帰りのほりにけり。

〔癸心集〕より

注1 尊勝陀羅尼……となえると罪障や災いを消し、寿命を延ばすなどの功德があるとされる呪文。

注2 陪從にて公事勤めける時……地下の楽人(演奏家)として、朝廷の行事に奉仕した時。

注3 水干……男性が着用する、簡素な衣服の一種。

注4 朝倉……現在の福岡県にある地名で、斉明天皇の仮宮があった。

注5 木の丸殿……丸木造りの粗末な御所。この表現は、「朝倉や 木の丸殿に 我が居れば 我が居れば 名乗りをしつつ 行くは誰」という神樂歌による。

問十五 和歌Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの三首中に見出される全ての活用語の活用形のうち、未然形はいくつあるか。次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア なし イ 一つ ウ 二つ エ 三つ オ 四つ

問十六 空欄 A に入るもつとも適当な語句を問題文中の波傍線部①～⑤から選び、その解答欄にマークせよ。

問十七 傍線部B「勤めは、功と志とによるわざなれば」の意味としてもっとも適當なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 追善供養を行なえば、功德を積み、心を磨く修練となるはずだから。
- イ 朝廷の勤務は、立てた手柄と忠誠心によって評価されるものだから。
- ウ 仏道の修行とは、実績と熱意によってなし遂げられる行為であるから。
- エ 人間の修養は、他者と自己とが交感し合う場所でこそ成立する営みだから。
- オ 風雅とは、弛まぬ努力と堅固な意志の力とがあいまって極められる道だから。

問十八 傍線部C「見参に入る」、傍線部E「これを奉れ」に見える敬語表現が敬意の対象とする人物は誰か。もっとも適當なものをそれぞれ次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 定子皇后宮
- イ 蓮如
- ウ 崇徳院
- エ 妹なる人
- オ 水干ばかりうちかけたる人

問十九 傍線部D「君に知られで帰るかなしさ」の意味としてもっとも適當なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 妹に会えぬまま帰京するのが悲しい。
- イ 愛しい貴方に見付からぬよう立ち去る。
- ウ 天皇に理解されず退去するのはみじめだ。
- エ 皇后への存念が全く報われない事がつらい。
- オ 院に気付かれぬまままたち戻るのは残念である。

問二十 和歌Ⅲで、「釣りする海人」とは誰を譬えているか。もっとも適當なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 定子皇后宮
- イ 蓮如
- ウ 崇徳院
- エ 妹なる人
- オ 水干ばかりうちかけたる人

問二十一 問題文において語られる「数寄」の説明としてもっとも適當なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 「数寄」とは、仏教の説く真理を悟り、行住坐臥を正しく行なう生き方そのものである。
- イ 「数寄」とは、例えば詩歌の道に心の底から没入し、他事を省みないようなことである。
- ウ 「数寄」とは、どんな不幸に遭っても諦めずに、強靱な人生哲学を保てとの教えである。
- エ 「数寄」とは、茶や花など中世的な美意識を感得した、風雅な精神生活への憧れである。
- オ 「数寄」とは、人情の機微を解し、何事に対しても己の誠意を尽くすという信念である。

〔以下 余白〕

早稲田大学 国際教養学部 一般入学試験問題の訂正内容

【国語】

問題用紙 2 ページ (一) Bの本文 2 行目

(誤)

云はなかった

(正)

云わなかった

問題用紙 2 ページ (一) Cの本文 1 行目

(誤)

彼は

(正)

彼れは

問題用紙 7 ページ 問 1 3

(誤)

傍線部 C 「優れた

(正)

傍線部 C 「すぐれた

以上